



編集後記

いよいよ年が明けた。雑誌としては前号の2021年1月号が年明けだが、発売日から行くと今号が2021年最初となる。

どなたにとってもそうであったと思うが、2020年は新型コロナウイルス感染症に振り回された1年だった。感染者数の推移に一喜一憂し、海外における感染拡大に耳をそばだて、ワクチンの開発状況に目を奪われ、そしてGOTOキャンペーンに踊らされた。

感染者数は、以前にも書いたが何人調べての数字なのか分からないければ判断のしようがない。分母が5000人なのか1万人なのかによって、同じ7000人感染と言われても、その数字の意味するものは全く違うはずである。さらに、年末が近づいた頃には、それまで3万円とも言われたPCR検査の料金が3000円程度にまで値下がりし、駅などに設置された検査所には長蛇の列が出来ていた。春先に緊急事態宣言が出されたにも関わらず、感染

者数が過去最高となっても緊急事態宣言にはならなかったのは、おそらくこうした事情があるのではないかと勘ぐりたくなる。それにしても、このパンデミック自体が人類にとつての脅威であり、世界的なレベルでの対応が急がれていることは間違いないはずだ。

必ずしも良い傾向ではないが、もしどこの国が自国の利益のために意図的にばら蒔いたというのでもない限り、これは世界の人類が利己だの国益だのという狭い見を捨てて、一丸となって対処しなければならぬ状況にほかならないのではあるまいか。

青臭い正義感で言うのではないが、このパンデミックによる影響は様々な分野で生きている庶民に甚大な被害をもたらしている。

飲食店や旅行業界、歌や演劇、映画などの表現者とその関係者たちのみならず、あらゆる場面で皺寄せが起きている。そしてもっとも新型コロナウイルスの至近距離にいる医療関係者も然りである。

国や自治体がその手当てをしようにも、余りにも範囲が広すぎて、た

だか10万円を配布する程度のことしか叶わないのが現状だろう。

青臭い理論を振りかざすつもりはないが、ここは先進諸国がリーダーシップを発揮し、呉越同舟、様々な国家間の思惑を捨て、様々な利害関係と主義主張を棚上げし、数多ある争議を一時休戦し、そこに費やされる費用とエネルギーを、この新型コロナウイルス感染症で苦しむ人々に振り分けることはできないものだろうか。

世界が手を結び、「コロナ休戦」となれば、多くの人びとが救われると思うのだがいかがだろう。

これから人類にどのような脅威や危機が訪れるかは誰にも分からないが、そうした時でも国益だの利己主義だのが横行しては、人類の未来は危ういではあるまいか。

世界の先進国の一員として、今こそ日本がそうしたリーダーシップを発揮できれば、世界から認められ、感謝され、そして未来に向けての発言力も獲得できると思うのだが、いかがだろう。

儂い初夢の物語である。

(溪)

月刊 公論

2月号 第54巻2号

令和3年2月1日発行 毎月20日発売
本体価格1,000円(税別) 送料87円

発行人 大中 吉一 編集人 林 溪清

発行所 株式会社財界通信社
〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町10-12 ポナフラービル
TEL.03-5379-5611(代) FAX.03-5379-5616

印刷所 株式会社廣済堂
取次店 日本出版販売/楽天ブックスネットワーク

- 直接ご購読をご希望の方は、本社までお問い合わせ下さい。
- 万一、乱丁、落丁などの不良品がございましたら、お取り替えいたします。